

今あることのつながりを見ていく —吉岡英幸先生へのインタビュー—

語り手：吉岡 英幸

聞き手、および本稿の構成・編集：古屋 憲章・古賀 万紀子

要旨

本稿では、吉岡英幸先生に対するインタビューをもとに、日本語教育研究者としての吉岡先生の半生が、次の五つのフェーズにより描かれている。①日本語教育研究のはじまり：視聴覚教材の使い方に関する工夫をまとめる。②視聴覚教育の実践と研究：自身の教育実践を記述することをおし、よりよい視聴覚教育の方法を探求する。③教材研究と研究室の立ち上げ：自身が行ってきた視聴覚教材の分類・整理を起点として、日本語教材の体系を記述する。また、大学院の設立と教員への就任にともない、「教材・教具研究室」を立ち上げる。④日本語教育史研究：教材研究の成果にもとづき、教材における文型を視点として日本語教育の変遷を記述する。⑤日本語教材アーカイブと日本語教科書復刻版の監修：次代の日本語教育研究者に史料を残すという使命感にもとづき、日本語教材の収集・保存、および日本語教科書復刻版の監修に携わる。

キーワード：研究者としての日本語教師、経験の共有、視点、使命感、継承

0. 本インタビューが行われた経緯、およびインタビューの概要

2017年9月11日、吉岡英幸先生が逝去された。いつでも我々後進の行く末を照らし、温かく見守ってくださった偉大なる恩師との、あまりに突然の別れであった。

本稿は、2017年7月31日に行われた吉岡英幸先生へのインタビューをもとに作成された。インタビューは、2時間8分にわたり行われた。聞き手は、本稿の構成・編集を担当した古屋と古賀である。吉岡・古屋・河住（2013）において記述されたインタビューでは、日本語教師としての吉岡先生の半生が語られた。それに対し、今回のインタビューでは、日本語教育研究者としての吉岡先生の半生を聴くことを目的とした。1965年という戦後の黎明期から長きにわたって日本語教育に携わってきた吉岡先生が、どのように研究と出会い、どのように研究にアプローチしてきたかを記述することにより、あらためて日本語教師が研究する意義に関して考える材料を提供できるのではないかと考えたためである。

インタビューの原稿化にあたっては、吉岡先生に第一稿をお送りし、確認と修正をお願いした。9月10日の午前9時ちょうどに吉岡先生から届いたメールには、参考文献と巻末の業績一覧表に修正を加えた版が添付されており、「本文のほうは修正が済み次第お送りします。」と書かれていた。ところが、その翌日、残念ながら帰らぬ人となられた。よって、本稿の本文に関しては、吉岡先生のご推敲を賜ることは叶わなかった。しかし、吉岡先生の生前最後のインタビューを世に出すべきだと考え、私たち（古屋・古賀）で原稿を完成させた。

本稿は、インタビューの文字化資料を「吉岡先生がどのように日本語教育研究および日本語教育研究者としての自身を意味づけてきたか」という観点に基づき、一人称一人語り形式で再構成したものである。なお、本文中で触れられる吉岡先生の研究業績に関しては、末尾の「表1 吉岡英幸先生の主な業績」を参照されたい。

1. どういうふうに授業を教えるかという工夫のようなもの

—日本語教育研究のはじまり—

ちょっと時代が違うかもしれないけど、我々が日本語教師になった頃の時代というのは、研究とはあんまり考えてないんですよ。大学の専任になった先生というのは、当然、教育と同時に研究をしなければいけないというのがあったわけですね。だけれども、僕が学生の頃に早稲田の語研〔語学教育研究所〕に出入りしていた頃も、日本語教育をしていらっしゃった先生方は、もちろん研究はそれぞれなさっていたと思うけれども、客観的に見て、ほかの学部先生ほど、研究業績というものがあって、ということではやっぱりなかったと、今になって思うんですね¹⁾。それはやっぱり日本語教育の歴史がそんなに深くないということも関係してるかもしれないし、日本語教育はやっぱり特殊で、一つの学問領域というのが社会的に見て、まだ基盤ができてなかった、ということと関係してると思いますね。

一つには、大学の中で日本語教師が日本語教育の専門として専任のポストがあるという時代ではなかった、ということと関係してるんですよ。ですから、例えば、大学で専任に着任してもらおうとか、雇うという場合でも、そういう従来の、ほかの研究分野のような研究業績がある人が応募をして、業績を審査してというふうにしてたら、先生がないんですよ。したがって、どうしたかという、早稲田の場合も、まあ大体、木村（宗男）先生あたりが最初の頃なんですけどね、専任になったのは、木村先生ご自身も長沼〔東京日本語学校〕で教師をしてらしてて、現場の先生²⁾。厳密な意味で（木村先生の）スタートってというのは、どこかわからないんだけど、フィリピンに行ってるして、帰ってきてという。で、戦後は長沼で教師としてやってらしてた。早稲田も専任が必要だ、日本語教育をやらなければいけないって、昭和30年かな。戦後、（早稲田大学で日本語教育が）再開されたのは、昭和30年なんですけども。初期の頃の日本語の先生というのは、木村先生あたり、永保（澄雄）先生もそうなの、あのあたり³⁾。それから、秋永（一枝）先生、田村（すず子）先生あたりが専任になっていらっしゃるというような時代なんですな⁴⁾⁵⁾。その頃を考えると、日本語教育の業績がある方が早稲田に来たという。早稲田だけじゃないんですよ。やっぱり日本語教育をしなければいけないとなったときに、教師を探さなければいけない。で、たぶんそういう人間のつながりとかってということを見ていくと、やっぱり早稲田の卒業生というのは先に調査があったと思うんですね。それで、木村先生が早稲田出身で、長沼でやってらしたというのもあったと思うし。だから、戦後はまず、そういう意味で現場の経験者を探すというところから始まったという。大学の場合でもね。

ただ、早稲田の場合は、やっぱり、ああ、面白いな、と思ったのは、早稲田大学が『講座日本語教育』という雑誌を出し始めるんですね⁶⁾。私も何回か（『講座日本語教育』に）

書いてるんだけど、その頃にそういう日本語教育の研究誌っていうのはなかったんですよ。だから、そういう意味で、その頃からずーっと続いてきたというのは、実は大変な早稲田の評価される一つの要素なんですね。で、なぜそういう雑誌ができたかという、それは、やっぱり先生方が研究職でもあるという認識の中で、「講習会を開こう」というふうにしたんですね。その頃、日本語教育の中で講習会というのはほとんどなかった。長沼が少しやっていたと思いますけれども。今のように養成講座、420時間、そんなものないですから、需要がある現場の先生たち、またはこれから教師になろうとする人たちのために、講習会を開くというのがスタートしたんですね。それで、スタートすると、みんなそれぞれ専門分野で何か分担しなきゃいけないでしょ。で、分担をしなきゃいけないからというので、それぞれみんな意識を持ち始めるんですね。たぶんそういうねらいがあったと思うんですね。で、夏に講習会やって、終わったあとで、秋から（講習会で）発表したものをもとに、ずっと原稿を書くんですね。それが第1号として出版される。それ、ずーっとこれから何十年も続いていくわけです。だから、『講座日本語教育』第1（分冊）、第2（分冊）、第3（分冊）というふうに行うというのは、実はあれは講習会の記録なんですね。（講習会は）1964（昭和39）年の夏から始まったはずですよ。（講習会で何を話すかは）自由です。自分が決めるんです。（自分の研究や専門分野は何かを）振り返らざるを得ないんです。人に向かって話すとは、そういうことなんです。それで、勉強になるわけですよ。それは木村先生もちらっとおっしゃってた。「や、自分たちの勉強だ」っておっしゃってたけどね。その頃、やっぱり私がすごく影響を受けたなあと思ったのは、（講習会における）木村先生の授業っていうのは、現場に直結してるんですよ。それで、視聴覚などのやり方も、おやりになったこともあるし、それから、どういうふうに授業を教えるかという工夫のようなものが大事だということを話してらっしゃるわけですね。例えば、あるときは、今考えたら誰もやらないそんなの、「写真の撮り方」なんて、講座のタイトルがあったんですね。「写真で一番大事なものはどこか」とか言って、そういう質問から入ったりね。つまり、写真の撮り方というのは、写真を撮ることによって、その写真を日本語教育の授業でどう使うかということとも結びついてるわけですよ。だから、それが必要だという。永保先生はお得意の「漫画の描き方」なんてことをやってるわけですよ。まあさすがに「漫画の描き方」というタイトルじゃなかったと思うんだけど、講習会ではそれやってましたね。そのイラスト、4コマ漫画を見せて、作文を書かせるとか、会話させるとかっていうふうなことの例なんですね。だから、じゃあ、イラストのやり方みたいなものをみんなでやってみようという講習会だったという。そういうふうなことがあったんですね。まあ森田（良行）先生ははじめから文法をずっとシリーズでやってらしたし、武部（良明）先生は表記ですよ（⁷⁾⁸⁾。

出身から言って、英語、英文学の出身、まあ木村先生なんかもそうですけど、それと国文学系、国語系がいると言うんだけど、確かに背景は調べればそうなんだけど、でも、日本語教育やり始めてからは、それを分けることの意味は、たぶんあんまりないというふうには思うんですね。やっぱり、現場で外国人に日本語を教えるということから自分が工夫してやっていくということに巻き込まれていけば、自分の出身は、もちろん影響がないわけではないけれども、結局、日本語教師として、みんな経験を積んでいくということだから

らね。それを区別できないことはないけれども、あんまり意味があるとは、私は思わないですね。だから、国文学だ、国語学だってみんな言うけども、日本語教育始めたあとで、日本語教育に役に立たない研究をやってたんだとしたら、私が知ってる限りにおいてはそんなことはないと思ってるんですね、みなさんは、周りにいる人はね。だから、背景そのものはあんまり、出身がこうだこうだっていうのはあんまり意味がないんじゃないかな、と思う。何を研究してらっしゃるかが問題であってね、我々の先輩であっても、同僚であってもね。そりゃそうだよ、留学生に毎日毎日仕事で教えてて、それを研究発表しなきゃいけないわけだから、聞く人たちは日本語教育の人たちしか来ないわけだから、講習会は。それは関係ないことやったら「意味がありません」って言われますからね。そういう意味では、みんな日本語教育の専門家なんじゃないかと思っています。

2. 自分はこういうことをやってました、っていう実例みたいなもの —視聴覚教育の実践と研究—

少しずつかな、というか、まあ人がどう思ってもいいや、と思って（研究を）やり始めたんだけどね。私は（新出の文型や語彙の）理解と同時に練習の方向にどう取り入れるか、とかいうことも含めて、両方ですね。その場合に、視聴覚を使うと学習者にとっても非常に楽しくできるし、定着も深まるのではないか、という。それは、一つは状況を設定する、っていう意味でも大きいと思ってるんですね。だから、後に演劇手法とかロールプレイとか、いろんな言葉が出てくるけど、そういうようなことの、先駆けみたいなことを、いろんなものを教室に持ち込んでやるとできますよ、っていうようなことをやってたんですね。視聴覚教材を多用して教室を活性化させる。同時に、教師は説明なんか必要ない。（教師が）何かを与えて、学習者が自分たちで動いていっていろんなことをする。（学習者が）楽しんでやってくれればそれなりに。それを先生はサポートするっていうふうに徹すればいいというふうに僕は思ってたんですね。だから、やりもらいだって、あげる／もらうというのは最初に理解できる。これはすぐ理解できるから、あとは全部もう、物を持ち込んで、それぞれみんなにやってもらうとか、というようなことをやりましたね。

結局、（研究の）スタートは、自分はこういうことをやってました、っていう実例みたいなものを紹介、なんです。それで反響があるっていうか、いや、こうじゃないか、っていうものが出てくれば自分もありがたいな、と思うんだけどあんまりそういうのはない。そういう論文は少なかつたんでしょうね。そういうことを示していくっていうようなことは多かつたですね。やっぱりこれは楽しいし面白いから、自分はいいと思うんですね。だけど、自分だけ思っても困るから、やっぱりほかの人はどうやるかっていうのも知りたいし、もしこうやったほうがいい、っていう批判が出ればもっとありがたい、っていう気持ちがあるわけ。だからまず、公表しないと誰も気づいてくれないから、っていうのが一つですね。（反響は）なかつたですね。私のその前の世代というか先輩のものの中にはあんまりなかつたんですね、自分はこうやっているっていうのは。でも、その頃から、私がそれをやり出した頃からは、少しずつ出始めたんじゃないかな。

もう一つ、視聴覚の、大きく言えば評価の中に入るんですけど、東京外大に行って最初

は普通の授業をやったんですけど、あるときから、割と早い時期に聴解の担当になったんですよ。全クラスの聴解をやってくれ、というふうになって。本来の導入と練習、というパートではない。一体、聴解っていうのは何をすればいいのかわからないんですね。それで、考えるようになって、聴解っていうのは要するに聴く技能だろう、聴く技能とは何だろう、っていうところからスタートするんですけど。それで、大学へ行って進学をして、そこで留学生が（講義に）ついていく、日本語を使って学習する、っていう生活に持っていくための予備教育として、大学に入る前のあり方、聴く技能に何が必要なかっていうことを考えざるを得ないわけですね。聴く技能どうするか、っていうことも、ほとんど論文がなかったんですけど。それで、何をしたらいいか、っていうのを散々いろいろ考えて、結局、1学期2学期3学期と分けて、初級中級上級っていう分け方してたんですけど、初級では何をするのか、どこまでいくのか、何ができればいいのかとかね。中級上級のレベルでは最終的に大学に行くわけだから講義を聴かなければいけないだろうと。そうすると、最終的に1年経って、終わるときにそこへ持っていく、完全にできるとは思わないけども、そこへ何とか食いついていけるぐらいの技能を、そうせざるを得ない、っていうことを考えたんですね。じゃあ、その前に2学期の終わりまで何をするか、1学期の終わりまで何をするか、というようなことを考えていく。結局、ビデオを活用しようと。その頃、ビデオがあったもんですから、一人でしょっちゅう学校のビデオを、録画しては、家帰って文字化して、ひたすらそれやってたんですね。それは何をするかっていうと、未習語がどのくらいか。未習語の何が大事かっていうと、未習語の類推力なんですよ。いろんなことを聴いてても、知らない言葉が出てくると、すぐわからない、放棄する、っていうのを止めさせるためにどうするかっていうのが、基本的には講義を聴く技能だろう、というふうに考えて。そのために、知らない言葉があっても気にするな、っていう。「状況や前の文や後ろの文からそれを考えればいい、知らなかったら忘れてもいいから、無視していいから」っていうようなことを言う。それで、そういうのを聴かせるわけですね。ニュースとかみたいなものを。それで、「何について言ってた？」っていうようなことを理解させるということをひたすらやってたんですよ、授業では。（そのような授業をふまえて）こういう方法があるとかね、つまり聴くとは何が大事かっていうようなことを書いたり、こういう方法があるのではないかと書いたり、ってなことをやってたんですね。

（論文に書くのは）繰り返してやってみてこれは大事だってわかって、っていうようなことですよ。（それが）研究っていう意識はあんまりなかった（笑）。だから私はずーっと今でも研究者じゃないと思ってるんです。教育者だと思ってるし、なりたいたいと思ってる。研究者かって言われたら、とても研究者じゃない、と、今でもそう思ってますよ。まあでも大学の教師になってからはなんか発表しなきゃいけないじゃないですか、義務、だからしょうがないですよ、これは。こっちがいい悪いじゃなくって、これしかないから、私はこう思うから、これしかできないからこれやります、というのが私の履歴ですね。だから、「研究か」って言われたらよくわからない。研究とはあんまり思ってない。ははは（笑）。やってみて、これ失敗した、と思ったら、それをできるだけ客観視して、文字にしてみようという考えですよ。うん。過程を見せることですね。手の内をさらけ出す。ま

あ講習会でそういう話してたら、「先生、日本語教育の先生って、そんなに手の内をさらけ出していいんですか？」って言われたことがある。つまりそれは、例えば視聴覚教材の使い方、実際に持って行ってこういう場合にこういうふうにするんだ、っていう実例を示したりすると、受講者が「へー」って言ってましたよね。「こういうやり方をしています、もっといい方法があるかもしれない」という話はしますよね。

最初の研究っていうのは、実践研究っていうのは、今言ったようなことですね。実際の経験から、最初は視聴覚の使い方みたいなものを中心にしていって、それから聴解教育、聴解指導のほうにずーっと移っていって、それが結局、広い意味で視聴覚教材の使い方みたいなものですからね。それは研究者から見たものじゃなくって、それが大事だろうな、それをやらない限り、目標に到達しないだろうというようなことですよ。だから私の話は非常に狭い世界のことだろうと。自分の周囲のことしか言ってないから。

3. 自分たちの経験の中から生まれたことを伝える

—教材研究と大学院の立ち上げ—

東京外大にいるときに、1983年に『教科書解題』[『教師用日本語教育ハンドブック別冊 教科書解題』]という本が国際交流基金から出てるんですね。河原崎(幹夫)さんと吉川(武時)さんが「教科書の解題ものを出したい」と基金から依頼されて、河原崎さんと吉川さんと私の3人でやったんですが。国際交流基金が海外の先生たちから「どういう教科書があるかわからない」、「注文するにしても海外にいと物が無いから」、そういう要求を受けて、(教材を)解説したものが欲しいというのがあって、その依頼があったんですよ^{9) 10)}。それで、教科書は二人(河原崎、吉川)でやるんだけど、視聴覚のビデオが何本か出始めた、まあ絵教材もそうだけれども、そこもやっぱりやらざるを得ない、ということでやってくれないか、というふうに話が来たんですね。それで『教科書解題』の中に、視聴覚教材などを含めて入れるということで、そっちを私が分担することになったという。それが、スタートなんですね。まあ主に分担したのは視聴覚教材だったんですけどね。市販されているビデオ教材などが出始めた時代だったものですから、そのビデオ教材も入れましょう、ということで入れたという。そういうことを教科書、まあ教材全体として解説するようなことをやったのがその始まりだったんですね。そのあともまた、1992年に『日本語教材概説』という本を新たに3人で出そうか、ということになって、そのときも同じように私は視聴覚教材を担当したんですね。やっているとどうしたって普通の教科書も含めて教材みたいなものにも興味をもって、どういう教材があるかとかね、どういう教材の特徴があるかってことを考えざるを得ないものですから。まあその辺がスタートですね。自分が興味がないわけじゃなかったんだけど、やっぱりそれは仕事で受けたらやらざるを得ないからという。そこから興味を持ち始めたということかな。

教材もいろんなものがあって、似ているようなところも共通のところもあるだけけれども。特に今現在っていうのは、非常にたくさんの種類(の教材)も出ますから。だから「日本語教育の授業が上手いかない」とか「教材がない」とか、特に海外の人はよく言うんですけども、調べればいいんだけど、確かに海外は手に入らないからしょうがない

んだらうと思うんですけどね。本当に多様な教材があるわけで、自分たちがやっていることがベストだと思わない方がいいわけ。たとえその教材を使ってるとしても、やり方はいろんなやり方があるんですよ。だから、そういう意味では、視点をもっと大きく持ってほしいと思うし。

早稲田に来て、日研〔大学院日本語教育研究科〕を立ち上げようっていう話が出たときに、最初、7人（の専任教員が）研究室・ゼミを持つということになって、そこで何を持ったんだ、っていう話になったんですよ¹¹⁾。そのときに決めたことは、好き勝手にやろうと。自分がやりたいことをまず出してみようという話になって、そのときに出したのが、私は「教材・教具」だったんですね。それは、視聴覚教材をずっとやってきたこともあるし、聴解も含めてやってきたってこともあって、ゼミを立ち上げるとしたら何がいいかなということから、「教材・教具」ということでできるだろう、ということで私は出してる。たぶんほかの人は誰もそんなことはしないだろうと思ったからね。それを出したらみんな重ならないからこれで行こう、ってことになったんです。それで、大学院で「教材・教具」というゼミを担当するようになって、これは嫌でも全体の教材のことをやらざるを得ないわけですよ。どっちかっていうと、やらざるを得ない状況からそっちに動いていく、というのがこれまでのいきさつですね。

（研究指導をするということは）否応なく、みんな覚悟してましたよ。ただ、そのやることが、結局日々教えるわけですから、教えることの中から生まれることを文章にすればいいという意識はありました。あなたのを。何か理念だけをやるというわけじゃなくて。基本的に大学院を立ち上げるときにみんなで確認し合ったことは、必ず日本語の授業は持ちましょうと。それを持たなかったら生きた研究なり、大学院はできない。実践から遠ざかったら意味がないから、必ず日本語センター〔日本語教育研究センター〕の授業を何コマか持つと。で、大学院生も教えると。同時にそこでリンクさせて実際の授業を見学させたりすることができるから、我々はどんなことがあっても実践（日本語の授業）を担当するという事は申し合わせをして、それでスタートしたんですね。ですから、自分たちの経験の中から生まれたことを大学院生に伝えることはできるだろうという考え方なんですね。研究者と言われたら、正直、今でも忸怩たる思いはあるんだけど。でも、今言ったように、日々教える自分の経験から後輩たちになにかしらのことを教えることはできるだろう、というぐらいの気持ち。私はね。ほかの先生たちは知らないけども。そういう考え方ですね。

4. 視点を据えて変遷を見ていく—日本語教育史研究—

教材を見るというのは、一つは、教材はいろんな種類があるということがあるでしょ。同じ教材、教材と言いながら、非常に広い範囲、視聴覚教材もある。そうすると教材の分類が必要だなんていうのが一つあったこと。それからもう一つは、私が教師になりたての頃からそうだけれども、どの教科書も初級は、量がちょっと違うだけで、ほとんど同じなんですよ。つまり、文型積み上げ式になってるじゃないですか。日本語を教えるということは、文型・語彙を積み重ねて教えていくということになるわけで、こんなこといっ

から、誰が考えたのかなというのは、初めから、見てたときから、不思議だなという気はあったんですね。で、教材に興味があって教材研究っていうのを立ち上げていくときに、どっかでいつかやらなきゃいけないなという気持ちはあったんですね。

そういう気持ちがあったことと、もう一つはまた木村先生に返るんだけれども、木村先生が、私が学生として（語研に）出入りしているときに、「勉強会やるけど、出る？」って言われて、行って。日本語教育史の勉強会を教室でやって、大学院生とか、それから留学生でも（自国に）帰って先生をやりたいという人が何人かいたんですよ。大学院のレベルですよ。そういう人たちを集めてやってたんですね。そこで、日本語教育史の授業を、項目をやったことがあって。正規の授業じゃないんですね。大学院の授業を持ってたわけじゃないから。日本語教育史のことを、ずっと続いたわけじゃないんですよ、1回か2回しか記憶にないんだけれども、やって、そのとき山口喜一郎なんて話も聞いたんだけれども。木村先生は、僕が大学院に行き始めたときに、個人的に「あなた論文を書け、書け」と。そりゃ、木村先生は、どっかで教師として就職させたいと思ってたんですよ。「業績が要るよ」ということは知ってたから、「論文を書け」と言ってた。木村先生は盛んに私の身を心配したんだと思うんですね。大学の先生になるんだったら業績が要るから。私、何もしないから。書くためにテーマを与えたいんです。今でも僕はそれに感謝してるんだけれども。例えば、こういう言い方したことがあるんです。「擬声語・擬態語について誰もやってないな」と。「私、自分でカード持ってるから、このカードを時間が無いからあなた整理してくれないか」というようなことを言われたことがあるんですね。私、何もしなかったけど（笑）。もらいもしなかったけど（笑）。なんとなくそれはわかったんですね。テーマを与えないと動かないだろうと思ったんですね。日本語教師として研究者になるためには。それで盛んに木村先生が誘いをかけてきたんだらうと。本心はそうだろうと思うんですね。でも、私は元々修論で中世和歌をやったわけだから、結びつかなかったんです。でも、いつの間にか日本語教育をやり始めて、結局そっちが中心になったときに、「日本語教育の歴史をやると、誰もやってないから」ということは（木村先生から）個人的には何回か言われたんですよ。だけど、私のイメージは、やるとしたらあれは年取ってからやるもんだと。どっかで本当にそう思ってたんですよ。今すぐやることじゃないと。なぜそう思ったかはいまだにわからないんだけど。今すぐじゃなくていいんじゃないかなと、どっかでそう思ってたんですね。それがずっと頭の片隅に残ってたんでしょね。

だから、やっとその恩に報いられたかなと思うのは、元々これは慶應で勉強会やってた日本語教育史談会〔現：日本語教育史研究会〕というのがあって、そこで木村先生米寿の記念の本『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』を出そうということになって、ある程度それが進み始めたときに相談があったので、「私も委員をやりたい、できることはやります、木村先生のために何かしなきゃいけないから」と委員の一人になって。それで私も論文を書いたんですね。それが「明治期の日本語教材」だったかな¹²⁾。木村先生の米寿を記念してという本だったから、私が代表して木村先生に差し上げるという役を負ったんですけども、それでやっと、日本語教育史を勧められてきて何十年経ったんだらうなと思いつつながら（笑）。（木村先生には）何にもこのことは言わなかったんだけれども。そういう思い出がありますね。

木村先生の最終講義というのが早稲田であったんですよ。その頃、僕はもう東京外大の専任になっていたんですけども。そのときの最終講義はやっぱりフィリピンに行って最後、悲惨だったということをおっしゃってたんですね¹³⁾。そういうことは二度と繰り返してはいけないというような趣旨だったんですね。そういう話だったので、木村先生はもちろん、戦争に駆り出されて、日本語教師として悲惨な体験を、最後まで、辛酸をなめた人ですよ。だからそういう世の中になってほしくないということは最後の講義でもおっしゃってたわけですし。やっぱり自分がそこで教師をしたということは、ずっと何らかの気持ちはあったんでしょうね。ある種の生き証人でもありますよね、木村先生は。ほかの人が経験してないことだから。そういうことは残しておきたいというのは、やっぱりあったんでしょうね。日本語教育界の中で「日本語教育史をやるべきだ」と言ったのは、やっぱり木村先生が初めだったようですね。ご自身も最初の頃のこと、明治の頃のことを調べて発表したこともあったしね。だからそういう意味では我々の先達だったんですね。

(1990年に)早稲田に来て、教材研究をやり始めて。それで、何のきっかけかわからないんですけども、早稲田大学の日本語教育がどうなってるかというのを誰かがやらなきゃいけないんじゃないか、というのは思い始めてたんですね。それで、そのときに思い切って大学史資料センターに訪ねて行ったことがあるんですね。「私は日本語教育をやってるんだけど、そういう歴史の何か史料はあるんですか」と。本当に漠然と、あるかないかも知らなかったんですね。「いや、自分で調べたらどうですか」と言われたんですよ。それで、古い図書館〔現：會津八一記念博物館〕の裏側に(大学史資料)センターがあって、そこに裏から入って行くと、いろんな史料があったんですね。「自由に見ていいです」って言うから、そこの職員の人に「日本語教育のことを調べてるんだ」と言ったら、「探してあげましょうか」という話になって。「こういうのがありますよ」と持ってきてくれたんですよ。そのときに清国留学生部というのがあるのがわかったんで、「その関係のものが見たいんだけどどこにあるか」って、そんなのもパツとあるわけじゃないからね。それで、実は関係の史料が、履歴書なんかがあるって、「それ見たい」って言ったら持って来てくれたんです。そのときに清国留学生部で教えた先生の履歴書みたいなものは見られたんですよ。それで、これは何とかしなきゃいけないなと思って、ずっと通い始めてね。そこでコピー取ったりしながら、そのときのカリキュラムがどうなってるかとかね。いろいろ調べていくうちに早稲田はかなり史料が残ってるってことがわかった。そういうことも知らなかったんですよ、私は。大学のカリキュラムは、実はきちんと製本されて図書館にあるんですね。それをずっと繰り返していくと、明治何年の科目とか、誰が教えたとかってというのはちゃんとあるんですよ。それから、卒業生名簿とか、卒業生何人とかっていうのもあるし、調べていけばいくほど、ないことはないんです。それからいろんなことをやり始めて。やっているうちにすごく面白くなってね。それで、1994年に「早稲田大学清国留学生部」というのを書いたんですね¹⁴⁾。歴史を形にしたのは、それが最初のきっかけなんですよ。その発端は、さっき言ったように、木村先生に「やってみないか、面白いよ、誰もやっていないよ」と言われたのが残っていたんだと思うんですよ。それで、本当に偶然に(大学史資料)センターに行ってそういうことを見つけ始めて、それからずっと図書館にこもって、いろんな史料を調べ始めた。それが非常に面白くなったんで

しょうね。

それ書いて、1995年かな、サバティカルでイギリスに行ってるときに、平高（史也）さんが日本語教育史の本を出すのに、『月刊日本語』にシリーズを出してるけども、今イギリスにいるんだから、イギリスの人（について）、2回ぐらい書いてくれと言われて、ダニエルズとアストンについて書いたんですね^{15) 16)}。それは本当に短いものですけどね。あとで「なんで私のところに言ってきたんだ」ときいたら、「いや、清国留学生部の歴史やってるじゃない、それで頼んだんだ」と平高さんが言ったんですね。

そういうことがあって、歴史はやり始めるとある種の義務感が出るんですよ。何の義務感かという、史料を探していくと、なかなか史料が欠けてるものが多いんですね。明治になるとさすがにそれはしょうがないやと思うんだけど、最近というか、昭和あたりに入ってきて史料がないとなると、これは本当に、早く言ってくればよかったのに、というのがいっぱい出てくるんですね。そういうことが何回かあると、これは本当に早くやっておかなきゃいけない、というふうに思い始めてね。それで教材をやってることもあったんで、主に教材を軸にしながら、教材だけでなくて人を軸にする場合もあるんだけど、歴史に興味があって面白いということもあるし、あんまり人がやっていないということもあったから。それで、日本語教育史をやり始めたんですね。

（教材を軸に日本語教育史を描くという手法は）今までないことはないですよ。関（正昭）さんと、新内（康子）さんが、大規模な論文「日本語教科書の系譜」をシリーズでずっと書いてるんですね^{17) 18) 19)}。だから、誰もやってなかったわけではないんですけども。私がやらなきゃいけないと思ったのは、彼ら二人が書いたようなことは、日本語教材を見るときに、教材の関連性というか、社会とか教師とか機関とかいろんな要素があるということで、流れがこうなると系譜を書いているわけですよ。僕はそういうやり方じゃなくて、一つの視点で時代がどう変わったかを書くべきだというのがずっとあったんですね。一体それは何だろうかなというふうに思ってたんですよ。教育史は非常に広いんですよ。僕はそれを、教材の中の学習項目という視点を設定したうえで、明治から現代までどういうふうに変ったかという変遷を見るというのが大事なんじゃないか、という気がずっとあったんですね。結局、その体系を全部書いたわけじゃないんだけど、また、時代が変わって、やり始めた頃には（日本語）能力試験のシラバスが公表されていて、すべての教科書や日本語教育があのシラバスを基にしてやっていたわけですね。文法項目があるわけですよ。日本語教育の流れが、到達が、学習項目の文法っていうそこにある。そこを軸に据えて、そこに行くためにどういう流れがあったかということを見ていくと、一つの流れが出るだろうというふうに思ったわけですよ。それで文型ということ（軸に）据えて、明治期の文型がどうだったかとか、大正、昭和というふうに、やろうと思ってたんですね。途中までしか終わってないんだけど、発想はそういうことなんですよ。

自分が教材をやってきて、それから日研にいるから教材をやらなきゃいけないという義務感もあったし、それ（教材）をやっぱり縦軸として見ておかないと、というような気持ちの一つあって、『徹底ガイド日本語教材』は今のものを取り上げた。それは『教科書解題』からやってるわけですよ。横軸はそういうやり方でやればいいと。教材を分析するとき、教材たったって非常に広いから、分類からやるべきなんですけれども、一応タイプが

あって、という話はずっと院生にもしてきたんだけど。横の分類や、現在どうなってるかという、どういう特徴があるか、大体そういうことをやってきたから、今後は縦軸でやるべきだと。縦軸ではどういうやり方があるかという、関さんたちも、「日本語教科書の系譜」シリーズで) いろんな各国の(教材)をやってくれてるんだけど、さっきも言ったように、僕は教材を、一つの視点を設定してずっとやっていくべきだろう、そうすれば非常に明確にわかるということですね。批判ということじゃないんだけど、それが一番よく教材の変遷がわかるのではないかという気持ちがあったんですね。それで、結局、文型が明治からずっと続いているので、その文型を(視点として)やってみようということ。その流れが最終的に、能力試験のシラバスのところにつながっていくという。だからそれも軸にしていって、それが教科書にどのぐらいあるかということもずっと調べ始めたわけですね。文型が好きなんじゃないんですけどね、僕は。ただ、教科書を作るときに、今は少し違うかもしれないけれども、多くがやっぱり文法、学習項目が柱になると思ってるんですよ。だからその一番大事なものを、視点を据えて変遷を、変化を見ていくと、日本語教材、または日本語教育の変化がわかるのではないかという考えですね。

(教材における文型を視点として日本語教育史を描いたことによって、後輩に何が示せたかという)一つは歴史の研究をする視点というか、一つの方法が、例が示せるということがありますね。それから、今後、教材を研究するという人が現れてくれば、方法論として、そういう視点の設定というのが大事になってくるだろうと思うんですね。それを示せばいいかなと。

直接、実践から出たものじゃないと言ったら、それは歴史のほうでしょうね。歴史は特に、日研では授業を持ったけれども、それはずっと後のことだからね、私が論文書き始めてからだから、あれは直接実践から出たものではない。でも、日本語教育史の中で僕がいくつか論文書いたのは、岡倉由三郎とかね、早稲田国際学院は日本語教育機関だからいいんだけど、あとは松宮弥平とかね、そういうことをやっていますからね²⁰⁾。教材に特化したわけではないんだけど、広い意味では関係しているけどね。日本語教育の流れの中でどういう役割をしたかということですから。(個々の日本語教師が何をしていたかを歴史的に見るという視点は)個々に史料が残っている限りにおいては、ありますよ。(だから)松宮弥平とか、松本亀次郎とかっていう、比較的史料がありそうなものは調べてみたりしたんです。ただ人物研究だけをやりたくないから、教材を軸にしながら、その人とどう関係かとか、何をしたら、ということをやりましたけど。史料があんまりないんですよ、やりたいんだけど。

5. 次の人にバトンを渡すという役割

—日本語教材アーカイブと日本語教科書復刻版の監修—

(自身の日本語教育史研究には)もう一つ動機があって。一つは古い教材などを研究し始めたときに思ったことなんですけれども、いろんな人を訪ねたり古い史料を漁ったりしてるときに、個人のところ、例えば、松本亀次郎のお孫さんかな、訪ねて行ったりすると、「何か史料残ってませんか」という話をすると、「もうちょっと早く来てくれればねえ」

とか、「捨てちゃった」とか。それが一件だけじゃないんですよ。

早稲田国際学院を調べたときに、早稲田奉仕園の図書館に一冊だけ『国際学院報』という雑誌が残ってて。大学が直接事業としてやったものじゃなくて、奉仕園でやったものだから、大学には残ってないんですね。それで、「これしかない」と言われて、それも欠番があるわけですね。何年に何人学生がいたかというのがその月報を見ていくとわかるんだけど、それが欠けていたりする。で、そこの所長をしていた名取（順一）先生という人がいらしたんだけど、「名取先生を知ってるか」と言うと、そこの職員が「名取先生のお子さんが、クリスチャンだから、奉仕園で会員になって、今でも来ていらっしゃいます」と言うからビックリして。結局、そこの教科書は半分以上残ってないんです。特に日本語教材は残ってない。名前はわかってるんですよ。何年にどういう教材ができた、っていう一覧表はわかってる。ところが、物がありません。だから、「それはぜひ連絡したい」と言って（名取先生のお子さんの）連絡先をきいて、電話をしたら、「もう何年か前に家を建て替えたときに全部処分しました」と言われて。そういう例がやっぱりいくつかあるんですね。教材というのは消耗品だから、個人だっていつまでだって取っていないですよ、書き込みしたりするから。だから、早稲田の図書館は本当によく残ってます。あれは、ほかの図書館よりもはるかによく取ってくれてるな、と僕は思うんですけども。

そういう意味で、これからの若者、自分はやる時間が限られてるのをわかってたから、これから誰か教材研究をやってくれる人に、自分が今できることは何か、ということを考えてたんですね。まず一つは、どういう教材があったということすら、誰も、どこにも把握されてないんですね。だから、いろんな史料から、どういう教材を、誰が書いたかという一覧表を作りたい、というのが目的だったんですね。次に、残ってるとしたらどこに残ってるか、ということも調べたいので、国内、それから韓国、中国、台湾辺りも含めて調査をしたりして。その史料を全部見る時間もないんですよ。だから、わかる限りにおいては史料を残しておきたい。そして、それをずっとまとめたんですね。院生にも手伝ってもらったけども。その前書きに、「教材を、古い教材も含めて、公的機関がどこかでそれをマイクロフィルムでもいいから保管してほしい」、それから「誰でも、いつでも、研究者が見たいときに見られるようにしてほしい」、ということ、いつも冒頭に書くわけですよ²¹⁾。（自身の日本語教育史研究には）そういうねらいがあったんですね。

今、研究がこう来て、実践研究が来て、教材の研究が来て、日本語教育史の研究が来て、日本語教育史の終わりのほうは教材の変遷を軸にしてやってきた。もう一つ、視点、研究といえるかどうかかわからないけれど、やってきたことは、（日本語教科書の）復刻版の監修なんですね。これは私にとっては意味があるだろうと思ってやってきた。それは、今言ったように、史料を探しても本当に苦勞するんですね。教材を調べたい、その教材が古い教材だとないんですよ。図書館にもどこ行ってもないとかね。そういうことがあって、結局、海外で1冊だけ手に入れたとか、それから長沼の図書館に眠ってたのを見たのかな、なかなか揃わないんですね。それで、これは私だけの問題ではなくて、これから何かを調べたいと思っても元がないし、どんどんなくなっていくし、時間が経つにしたがってなくなるわけだから、早くしなきゃいけないということで。

大学院にいるときに、冬至書房の社長が私のところへしょっちゅう来てたんですね。結

局、復刻版を出してもいいという話。私のところに来るまでに何点か出してたんですけどね。日本語教材のところだね。そのネタがないかということだったんですけど、私は「あなたのところで出してくれるならやりましょう、それは次の世代のためにとって意味があることだから」と言って、それは何点かやったんですね。5回出したのかな²²⁾。簡単な解説を書いて出したんだけど。それは教材研究の一環でもあり同時に、私が次の世代にできることといたらそういうことかなと思って、やったんですけどね。

それで、いろいろ盛んに言っていたのは、これも歴史になるんだけど、戦時中に、私に言わせれば、国家が実施していた日本語教育という時代があって。日本語教育振興会というのを文部省が作って、その中心に座ったのは、最初、松宮弥平だったんだけど、すぐに外されて、長沼直兄が理事長になって、そこでやってたんです。膨大な数の日本語教材を作って、南方や中国に送ったんですね。ところが、終戦になったときに、長沼さんが日本語教育振興会を一応は解散したんですよ。もう理事もバラバラだったのかな。(解散)したんだけど、戦後すぐに、いわゆる進駐軍とか占領軍が来たときに、面白いと思ったのは、歴史を見ると、長沼さんが昭和21年に東京に言語文化研究所というのを作るんですね。どう考えたってあれはおかしいんですよ。戦争が終わってすぐに機関を立ち上げるって普通はありえない。しかも戦時中に非常に大きな役割を果たした人だから、刑務所に行ってもおかしくない。逆に出てきたというんで、何だろうと思ってたんだけど、よくよく考えればわかるんですね。長沼さんは元々アメリカ大使館で教えてたんですね。で、『標準日本語読本』7巻を一人で作ったんだけど。大使館っていうのは、今でもそうだけど、軍人がいっぱい入ってるんです。スパイなんかやるために。軍事情報を集めるために。だから、軍の高官みたいな者が学生って、いっぱいいたんですよ。その人たちがアメリカと日本が戦争になると、(アメリカに)帰って大規模な日本語教育をやるんですね。2万人ぐらい教えるんだけど、そこで使った教科書が長沼の『標準日本語読本』なんですよ。それはなんでかっていうと、大使館で習った連中たちが、軍の将校たちがそれで習ったから、それを使って教えたわけです。そういう関係があった。それで、終戦後すぐに駐留軍、GHQが来て、結局長沼さんのところに行っただけで、相談に。長沼さんのところに行って、日本語教育振興会の財産をどうするか、処分しなくちゃいけないって話になって、結局、長沼さんが理事をしたこともあって引き取るようになった。引き取るにあたっては、もう解散をして、組織がないからって言って、新たに言語文化研究所というのを作って、そこで財産を引き取ったということなんです。財産は何かっていうと、本なんです。古い日本語教材なんです。それをあそこで持ってたんですね。あその図書室で眠ってるっていうのは何回も聞いてるんだけど、私はその教材が見たくてしょうがないわけです。性格上あれはオープンにすべきだと、私は思ったんですね。何回か機会があるたびにそういう言い方をしてたんだけど。結局、現在は、協力してくれた人は、私がこの復刻版を出すときに、その校長をちょっと知ってて、できるだけ早い、初版か再版あたりのものを出すほうがその時代のことわかるし、ということで調べたら、どうも長沼にしかないんですね、一つだけ。で、そこに行ったら「協力します」と言ってきて、復刻版(を出版するにあたって)は、そののを借りたんですけどね。そのあとで、みんなのそういう意見があったんでしょうね。長沼では結局やりきれなかった

んだらうな。長沼で2回、復刻版出したんです。けれども、あまりにも膨大な本があって、結局、東京外大に寄贈して、東京外大がそれを引き取って、今、図書館に入れて、それをアーカイブじゃないけど、オープンにしたんです。だけど、半分ぐらいは見られないんじゃないかな。誰でも見られるようになってるんですが、著作権の問題があって、作者が死んで50年というのが生きてるもんだから。誰かが（作者を）教えてくれればオープンにしたいと言ってるんですよ。私も協力をして調べただけけれども、わからないんですね。早稲田国際学院の教材があることがわかったんで、見たかったんですけども、その作者が、当然（死後）50年になってるはずなんだけれども、何年になったかというのを（確認するために）、奉仕園に連絡とって、「この人の連絡先わからないか」って言っても、わからない。早稲田国際学院の教科書があるんですけども、結局、オープンになってないんですよ。だから、そういうようなことがあって、いろんな意味で、早くしないと教材はどんどん失われるばかりだということがあってね。それでこういう仕事を、意識があって、一つは復刻版の仕事をしてるということなんです。

（教材が残っていれば）これからまた、若い人が研究できるかなと。早稲田の視聴覚教材もそうなんです。早稲田の図書館というのは、よそと比べてはるかに予算が多かったんです。それで、大学の視聴覚教材とか教材は、注文するとほとんどみんな買ってたんですよ。だから、かなり膨大な教材が早稲田にはあった。よそはそんな潤沢な費用はないのを知ってたんですね。それで、7号館から移転をするときに、もう部屋がないし、処分するということになって「ちょっと待ってくれ、あれは貴重な本なんだ、特にビデオとか古いものは、もうよそにないはずだから、あれは焼却するとそのままになるから、私個人的に手伝えることがあればやるから」ということで。ビデオとかも湿気があったら駄目になるじゃないですか。だから、DVDなんかは落として、それを持っておけば、院生も使えるし、ぜひ今のうちにこれを残してほしい（と言った）。（それで）コピーをしてもらって、今もセットはDVDの形で日研のどこかにあるんです。リストを作って、「ここにあるよ」と事務所に言ったのに、もう私が辞めてから「わからない」と連絡があって、もう1回、「ここにあるはずだし、コピーというか、リストはここにあるから」って、持っているものを添付して送ったりしたんだけどね。興味がある人がいなくなっちゃうと、事務もすぐにわからなくなりますね。

辞める、あと何年で定年だって数え始めた頃に、やっぱりやっておかないといけないなという気になってね。そういう意識はありますよ、それは。結局、我々はそうなんです。次の人にバトンを渡すという役割だらうなという気はしますね。今あることのつながりを見ていかないと、今がどういう時代かとかね、というのはやっぱり見えにくいな、という気がしますね。

6. むすびに代えて—バトンを受け取った者の使命—

本稿では、吉岡先生独特の柔らかくもウィットに富んだ言い回しにより、一人の日本語教師が実践経験をもとに研究テーマを見いだしていくプロセスを、当時の社会情勢や様々な要因とともに描き出すことができた。若い世代の読者のみならず、あらゆる世代の読者

にとって、目から鱗が落ちたり、共感したりする話があったのではないだろうか。

例えば、視聴覚教育の実践経験をもとに論文を書いたというエピソードからは、一人の日本語教師が研究と出会い、研究にアプローチするプロセスがありありと見えてくる。日本語を学ぶ人たちの背景や社会的位置づけを考えたとき、彼らに「何が必要なのか」を「考えざるを得ない」。そこで、授業で「何をしたらいいか」を「散々いろいろ考えて」、教育目標を決め、学習計画を立て、必要に応じて教材や教授法を開発する。そして、そうした実践の「過程を見せる」ために公に発信することが、「研究」であった。

このように、吉岡先生の日本語教育の実践と研究とは密接につながっており、自身のことを「ずーっと今でも研究者じゃないと思ってるんです。教育者だと思ってるし、なりたいたいと思ってる。」と語っている。正に日本語教育者として研究と向き合ってきたといえよう。

吉岡先生はそうして教育や研究に実直な姿勢を貫くことで、我々を教え導いてくださった。その学恩を胸に歩み続ける我々に託された使命が、次の言葉に表れている。

「次の人にバトンを渡すという役割だろうなという気はしますね。今あることつながりを見ていかないと、今がどういう時代かとかね、というのはやっぱり見えにくいな、という気がしますね。」

日本語教育に携わる我々が歴史的な経緯をふまえてしっかりと現状を見据え、新たな日本語教育の時代を切り拓いていく。それが、先人からのバトンを受け取り、また後進へと繋いでいくことになるだろう。

注

- 1) () は補足, [] は文中に現れる機関や書籍の正式名称や現名称を表す。
- 2) 木村宗男：文部省南方派遣日本語教育要員，東京日本語学校専任講師，早稲田大学語学教育研究所教授を歴任。早稲田大学名誉教授。主な著書に『日本語教授法—研究と実践—』（凡人社）がある。
- 3) 永保澄雄：早稲田大学語学教育研究所助教授，大阪教育大学教育学部教授，龍谷大学経済学部教授，京都日本語学校校長を歴任。主な著書に『日本語直接教授法』（創拓社），『絵を描いて教える日本語』（創拓社）がある。
- 4) 秋永一枝：早稲田大学名誉教授。主な著書に『古今和歌集声点本の研究』資料篇・索引篇・研究篇（校倉書房），『日本語音韻史・アクセント史論』（笠間書院）がある。
- 5) 田村すず子：早稲田大学名誉教授。主な著書に『アイヌ語沙流方言辞典』（草風館），『アイヌ語の世界』（吉川弘文館）がある。
- 6) 『講座日本語教育』は，1965年から2006年まで全42分冊が発行された。その間，早稲田大学内の組織改編等にもない，発行機関が，早稲田大学語学教育研究所（1分冊～23分冊）→早稲田大学日本語研究教育センター（24分冊～41分冊）→早稲田大学日本語教育研究センター（42分冊）と変遷している。なお，2012年に新たな日本語教育研究センター発行の紀要として，本誌『早稲田日本語教育実践研究』が創刊された。
- 7) 森田良行：早稲田大学名誉教授。主な著書に『基礎日本語辞典』（角川書店），『動詞の意味論的文法研究』（明治書院）がある。
- 8) 武部良明：衆議院速記者養成所教授，早稲田大学語学教育研究所教授を歴任。主な著書に『文字表記と日本語教育』（凡人社），『漢字はむずかしくない—24の法則ですべての漢字がマスターできる—』（アルク）がある。
- 9) 河原崎幹夫：国際学友会日本語学校講師，コロンボ・プラン専門家，東京外国語大学付属

日本語学校教授，東海大学留学生教育センター教授，杏林大学外国語学部教授を歴任。主な著書に『日本語かな入門』（凡人社），『毎日の聞きとり 50 日—中級日本語聴解練習—』（凡人社）がある。

- 10) 吉川武時：東京外国語大学留学生日本語教育センター教授，拓殖大学国際開発学部教授を歴任。東京外国語大学名誉教授。主な著書に『日本語文法入門』（アルク），『形式名詞がこれでわかる』（ひつじ書房）がある。
- 11) 大学院立ち上げの経緯に関しては，吉岡・細川ほか（2013）に詳しい。
- 12) 吉岡英幸（2000）「明治期の日本語教材」木村宗男先生米寿記念論集刊行委員会編『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』pp.13-25.
- 13) 木村（1991）によれば，木村氏は「昭和 18 年 3 月，文部省南方派遣日本語教育要員養成所を出て，10 月，フィリピンに派遣され，昭和 21 年 12 月，帰国した」（p.158）。
- 14) 吉岡英幸（1994）「早稲田大学清国留学生部—そのカリキュラムと日本語教師—」『講座日本語教育』29，83-104.
- 15) 平高史也：慶應義塾大学総合政策学部教授。主な著書に『日本語中級 J501—中級から上級へ—』（スリーエーネットワーク），『日本語教育叢書「つくる」読解教材を作る』（スリーエーネットワーク），『日本語・日本語教育の研究—その今，その歴史—』（スリーエーネットワーク）がある。
- 16) 平高史也氏は，『月刊日本語』（アルク）1995 年 4 月号から「欧米の日本語教育史」の連載を開始した。吉岡先生は，同誌 1995 年 7 月号に「欧米の日本語教育史 4 イギリス（1）学究の徒・外交官アストン」を，1995 年 8 月号に「欧米の日本語教育史 5 イギリス（2）戦中の日本語教育の柱ダニエルズ」を寄稿している。
- 17) 関正昭：愛知教育大学教育学部助教授，鹿児島女子大学文学部教授，東海大学国際教育センター教授を歴任。主な著書に『日本語教授法（日本語教師養成シリーズ）』（東京法令出版），『日本語中級 J501—中級から上級へ—』（スリーエーネットワーク），『日本語教育叢書「つくる」読解教材を作る』（スリーエーネットワーク）がある。
- 18) 新内康子：志學館大学人間関係学部教授。主な著書に『日本語中級 J501—中級から上級へ—』（スリーエーネットワーク），『みんなの日本語中級 I・II』（スリーエーネットワーク），『日本語・日本語教育の研究—その今，その歴史—』（スリーエーネットワーク）がある。
- 19) 1993 年から 1995 年にかけて，関正昭氏と新内康子氏によるシリーズ論文「日本語教科書の系譜」が『鹿児島女子大学紀要』Vol.14（1）～Vol.17（1）に計 6 本掲載された。また，同時期に『月刊日本語』（1994 年 4 月号～1995 年 3 月号）誌上でも，両氏による同タイトルの連載が行われた。
- 20) 岡倉由三郎，早稲田国際学院，松宮弥平に関する吉岡先生の主な論文は，次の 3 点である。
 - ・吉岡英幸（1997）「岡倉由三郎と日本語教育」『講座日本語教育』32，98-111.
 - ・吉岡英幸（1998）「早稲田国際学院の日本語教育」『日本語研究教育センター紀要』11，205-223.
 - ・吉岡英幸（2001）「松宮弥平の『日本語会話』と日本語教授法観」『日本語研究教育センター紀要』14，103-122.
- 21) 吉岡編（2012）の「本研究の概要」には，「今後の課題」として，次のような記述がある。「本来，教材は消耗品であり，使用した時点で役目が終わるため処分されることが多く，図書館でもあまり所蔵されていない。あっても少し古くなると処分されるのが普通である。こうした中，戦前はもちろん戦後でも 1960 年代以前の教材の実物を見るのが難しくなってきた中，先人の残した貴重な遺産が年々失われつつあるのが現状である。こうした現状を改善するために，早急に対策を立てなければならない。そのためには，公的な特定の機関を定め予算を集中するなどして，国内外に分散している教材をはじめとする日本語教育関連の文献を収集・管理することが急務であると考え。」（pp.4-5）
- 22) 吉岡英幸監修・解説による次の 6 点の復刻版日本語教科書が冬至書房から出版されている。
 - ・『雑誌 華北日本語 [復刻版]』（2009 年）

- ・『効果的速成式 標準日本語読本 [復刻版]』全5巻 (2010年)
- ・『松本亀次郎選集 [復刻版]』全7巻 (2011年)
- ・『台湾総督府日本語教材集 [復刻版]』全5巻 (2012年)
- ・『華北日本語教育研究所叢書 [復刻版]』全2巻 (2013年)
- ・『正則日本語講座選集 [復刻版]』全6巻 (2014年)

参考文献

- 木村宗男 (1991) 「戦時南方占領地における日本語教育」木村宗男編『講座日本語と日本語教育 第15巻 日本語教育の歴史』明治書院, 145-159.
- 吉岡英幸編 (2012) 『日本語教材目録及び日本語教材関連論文目録』文部科学省科学研究費補助金による基盤研究 (C) 21520550 「日本語教材の史的研究」研究成果報告書, 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 吉岡英幸・古屋憲章・河住有希子 (2013) 「日本語をとおしてお互いに知り合う—吉岡英幸先生へのインタビュー—」『早稲田日本語教育実践研究』1, 50-64.
- 吉岡英幸・細川英雄・蒲谷宏・古屋憲章・高木美嘉・館岡洋子 (2013) 「日本語教育学のこれまでとこれから—早稲田の日本語教育を基点として—」『早稲田日本語教育学』13, 1-25.

表1 吉岡英幸先生の主な業績

年	日本語教育関係の履歴	著書・論文
1963	早稲田大学文学部に入学。	
1965	早稲田大学語学教育研究所でアルバイトを始める。	
1967	早稲田大学大学院文学研究科に入学。 海外技術協力事業団で日本語を教え始める。	
1968	早稲田大学国際部で日本語を教え始める。	
1973	早稲田大学語学教育研究所で日本語を教え始める。	
1974	東京外国語大学付属日本語学校着任。	
1978		「VTRを使用した聴解指導について」『日本語学校論集』5, 136-147.
1979		「視聴覚教育の実例」『日本語教育』38, 55-63.
1980		「大学予備教育における聴解指導の方法」『日本語学校論集』7, 100-110.
1983		『教師用日本語教育ハンドブック別冊 教科書解題』(共著) 国際交流基金
1986	東京外国語大学留学生教育教材開発センター着任。	
1987		『日本語教師養成通信講座 日本語の文法3』(共著) アルク
1989		「口頭表現の指導と問題点」『講座日本語教育』24, 169-178. 「視聴覚教材」『日本語教授法』桜楓社, pp.127-143.
1990	早稲田大学日本語研究教育センター着任。	「視聴覚教育」『日本語教育への道—日本語教育のための実践的知識と教授法』凡人社, pp.108-118. 『一年で社説が読めた—東京外国語大学附属日本語学校の365日—』(斎藤次郎編, 共著) 研究社出版

年	日本語教育関係の履歴	著書・論文
1991		「表現のための基礎練習—再生練習の方法—」『講座日本語教育』26, 20-31.
1992		『日本語教材概説』（共著）北星堂 「専門教育への橋渡しのためのビデオ教材の可能性」『講座日本語教育』27, 18-30.
1993		「聞き取り能力—留学生と日本人の調査分析—」『講座日本語教育』28, 47-39.
1994		「早稲田大学清国留学生部—そのカリキュラムと日本語教師—」『講座日本語教育』29, 83-104.
1995		「欧米の日本語教育史4 イギリス（1）学究の徒・外交官アストン」『月刊日本語』8(7), 48. →関正昭・平高史也編（1997）『日本語教育史』アルク, pp.118-119. 「欧米の日本語教育史5 イギリス（2）戦中の日本語教育の柱 ダニエルズ」『月刊日本語』8(8), 56. →関正昭・平高史也編（1997）『日本語教育史』アルク, pp.120-121.
1996		「アストン『日本口語文典』のローマ字表記」『早稲田大学文学研究科紀要』41(3), 25-32. 「イギリスの日本語教育の現状と課題」『講座日本語教育』31, 55-73.
1997		「岡倉由三郎と日本語教育」『講座日本語教育』32, 98-111. 「視聴覚教材（展望1997）（研究の動向日本語教授資料）」『日本語教育』94, 123-126.
1998	早稲田大学日本語研究教育センター所長就任。	「早稲田国際学院の日本語教育」『日本語研究教育センター紀要』111, 205-223.
1999		「明治期の日本語教科書の「文型」」『日本語研究と日本語教育』明治書院, pp.391-404. 「留学生に対する日本語教育の現状と課題（特集 大学の国際交流）」『大学時報』48(264), 54-57.
2000		「明治期の日本語教材」『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』（共編著）凡人社, pp.13-25. 「ドイツにおける日本語教育の現状と課題」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』（共著）13, 141-153. 「明治期の日本語会話教材」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』13, 129-139.
2001	早稲田大学大学院日本語教育研究科研究科長就任。	2001-2003 年度基盤研究（C）「日本語教育における教材・教授法の史的的研究」 「金井保三著『日語指南』の文法学習項目」『講座日本語教育』37, 14-26. 「松宮弥平の『日本語会話』と日本語教授法観」『日本語研究教育センター紀要』14, 103-122.
2002		「早稲田大学大学院日本語教育研究科開設記念シンポジウム」『早稲田大学日本語教育研究』1, 1-20. 「振武学校の日本語教材」『早稲田大学日本語教育研究』1, 91-99. 「明治期の語法型教材」『日本語研究教育センター紀要』15, 133-146.
2003		「明治後期の語法型教材」『早稲田大学日本語教育研究』2, 27-36.

年	日本語教育関係の履歴	著書・論文
2004		『第二次大戦期までの日本語教育関係文献目録（科研基盤研究（C）「日本語教育における教材・教授法の史的研究」成果報告書）』
2005		2005-2007年度基盤研究（C）「日本語教育における教材・教授法の史的研究」 「松本亀次郎編纂の日本語教材—語法型教材を中心に—」 『早稲田大学日本語教育研究』6, 15-27.
2006		「教材・教具の歴史と展望」『早稲田日本語教育の歴史と展望』アルク, pp.7-25.
2008		『徹底ガイド日本語教材』（編著）凡人社 『第二次大戦期以降の日本語教育教材目録（科研基盤研究（C）「日本語教育における教材・教授法の史的研究」成果報告書）』
2009		2009-2011年度基盤研究（C）「日本語教材の史的研究」 『雑誌 華北日本語 [復刻版]』（監修・解説）冬至書房 「最近の日本語教材の動向」『日本語学』28(10), 4-11.
2010		『効果的速成式 標準日本語読本 [復刻版]』（監修・解説）冬至書房
2011		「日本語教材から見た日本語能力観」『早稲田日本語教育学』9, 1-7. 『松本亀次郎選集 [復刻版]』（監修・解説）冬至書房
2012		『台湾総督府日本語教材集 [復刻版]』（監修・解説）冬至書房 「日本語教材の変遷と新しい動向」『日本語教育研究（韓国日本語教育学会）』24, 7-19. 『日本語教材目録及び日本語教材関連論文目録（科研基盤研究（C）「日本語教材の史的研究」成果報告書）』
2013	早稲田大学を定年退職。	「日本語をとおしてお互いに知り合う—吉岡英幸先生へのインタビュー—」『早稲田日本語教育実践研究』（共著）1, 50-64. 「鼎談 日本語教育学のこれまでとこれから—早稲田の日本語教育を基点として—」『早稲田日本語教育学』（共著）13, 1-25. 『華北日本語教育研究所叢書 [復刻版]』（監修・解説）冬至書房
2014		『正則日本語講座選集 [復刻版]』（監修・解説）冬至書房
2016		『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立をめざして—』（共編著）くろしお出版 「早稲田大学における日本語教育史」『早稲田日本語教育学』20, 1-20.

謝辞

本稿の掲載にあたり、吉岡英幸先生の奥様の吉岡珠江様に原稿をご確認いただきました。ここに謹んで感謝申し上げます。

（よしおか ひでゆき，早稲田大学名誉教授）
（ふるや のりあき，早稲田大学大学院日本語教育研究科院生）
（こが まきこ，早稲田大学大学院日本語教育研究科院生）